

運動の楽しさを味わいながら、 主体的に運動に取り組む子供の育成

全校生徒数	138名(男子73名 女子65名)		
全クラス数	6	教職員数	13
運動部活動数	6	運動部活動参加率	55%

取組時の課題と目的

1 取組時の課題

- ・ 進んで運動に取り組む意欲が低い子供が一定数いる。
- ・ 「体力・運動能力調査」の項目で全国平均を下回る種目が毎年複数ある。

2 取組の目的

- (1) 体を動かす楽しさや心地よさを味わい、運動に関わることが好きな子供を育成したいと考えたため。
- (2) 主体的に運動に関わろうとする生徒や、自己や集団の課題解決に向けて粘り強く取り組む子供を育成したいと考えたため。

取組の内容

1 視点1：教科体育における取組

(1) 協働授業の実施

9年間の学びの系統性を踏まえ、前期課程と後期課程の教諭による協働した授業づくり

(2) 共通実践の取組

- ① 主運動につながる補強運動・運動遊びの実施
- ② 個人やチームの課題に応じた、活動の選択ができる場面の設定
- ③ ICT 機器の効果的な活用
- ④ 見通しと振り返りの充実

2 視点2：教科外体育における取組

(1) 持続可能な全校での取組

- ① ちょトレの取組
- ② 「体力アップ!チャレンジかごしま」の取組

(2) 児童生徒会主体の取組

- ① 「体力・運動能力調査」に向けた講座の実施
- ② みんなで遊ぶ日の企画・実施
- ③ 体育大会における「児童生徒会種目」の実施

(3) 自主的に運動に取り組める環境の設定

3 家庭・地域と連携した取組

(1) 学校保健委員会での取組

(2) 家庭との連携(家庭学習と生活習慣について)

(3) 地域の人材活用

- ① 授業での活用
- ② 部活動指導での活用
- ③ コミュニティ・スクールの日の取組

●工夫したこと

- ① 教科体育において、発達の段階や子供の実態に応じて、「一斉指導」や「同一内容」ではなく、個人やチームの課題に応じて、自分たちで活動を選択できる場面を設定している。そのために、「何か課題か」子供自身が明確にするための時間設定や、発問を重視した。
- ② 教科外体育における工夫として、「ちょトレ」と称し、全学級で朝の会の少しの時間を活用して、教室でできるトレーニングや運動遊びの実践を行った。

取組の成果

- ① 体育・保健体育における学習の系統性を踏まえ、共通実践事項を明確にし、各学年で取り組むことで、一貫した指導の充実を図ることにつながった。
- ② 意識調査の結果を比較すると、運動をすることに肯定的評価の割合が増えており、運動の楽しさを味わいながら、主体的に運動に取り組む意識が高まっていると言える。
- ③ 「体力・運動能力調査」の結果については、全体の3割の子供が、前年度と比較して総合評価が上がっていた。また、個人得点も経年比較すると、8割の子供が前年度を超える記録となった。
- ④ 親子で運動を通して触れ合う「チャレンジウィーク」の取組については、習慣化を図ることができつつあり、保護者からも「会話が増えた。」「楽しい時間である。」など多くの家庭から肯定的な感想が寄せられた。

今後の課題

- ① 意識調査の全体的な結果としては、肯定的評価が高まっているが、一方で、肯定的評価が低くなった学年もあった。学年や子供の実態に応じた取組を継続して行っていく必要がある。
- ② 生活習慣の確立など、健康面からのアプローチが必要な子供がいる。家庭での過ごし方を改善するよう働きかけるなど、家庭や地域との連携を密に図っていく必要がある。

- ❑ 1 体を動かす楽しさや心地よさを味わい、運動に関わることが好きな子供
- ❑ 2 主体的に運動に関わろうとする子供
- ❑ 3 自己や集団の課題解決に向けて粘り強く取り組む子供



視点1：教科体育における実践



【写真左】後期課程保健体育科教諭による、前期課程体育授業のソフトボール投げの協働授業の様子

【写真右】後期課程バスケットボールの授業におけるチームでの課題確認ミーティングの様子

視点2：教科外体育における実践



【写真左】体育大会でのチャレンジかごしま「長縄エイトマン」の様子

【写真右】前期課程持久走大会・後期課程学級対抗駅伝競走大会に向けた、朝の自主練習の様子

視点3：家庭・地域との連携



コミュニティ・スクールの日における「グラウンドゴルフ」の様子

学校保健委員会による、親子で運動・ストレッチ講座の様子

9年生球技・サッカーにおける出前授業の様子